問題提起

何のための国語教育か

2013/08/03

大阪府立北野高等学校　桝井英人

■アセンブリーということ

アセンブリー（assembly）というのは、「目的を持った集会」という意味だそうです。「全校集会」なら、「スクール・アセンブリー」。そういえば、日本語でも、「職場集会」とか「学年集会」などというと、何か緊急の目的をもった集まりという感じがして、緊張感とモチベーションの高まりを感じます。この集まりに、アセンブリーという名前をつけたことには、深い意味があるように感じます。

「何のための国語教育か」という標題は、この場が、この問いについて考えることを目的とした集会であることを意味し、そればかりではなく、日々の教室自体が、ある目的のための〈集会〉であることを示唆しています。正確には、ある目的のための〈集会〉であるべきだが、私たちはそれを自覚し、共有しているのだろうか、という問いを提起しているということです。

理想の教室を考えようという課題を生徒と考えたとき、次のような問題提起を書いた生徒がいました。

> …授業で取り上げた作品に共感し、感情移入できる生徒には、感動的なものであろうが、それができない生徒には苦痛で仕方がないものになるであろう。
>
> そして、国語の目的が、国語と学習者という一対一の対話であるため、国語と向き合うことをやめた生徒が、再び向き合うようになるようなシステムは示されていない。授業に参加しない生徒を授業に参加させるのは難しい。寝ている生徒を起こすことや、数学のプリントをしている生徒からプリントを取り上げることをしても、国語の授業と向き合うようにはならない。いったん授業の参加をやめた生徒がまた、真の意味で国語を学ぶようになるのは大変難しいと思われる。カリスマ的な教師との出会いというような奇跡がなければ、国語嫌いは一生治らないようになっているのである。

彼のいうようなズレが教室の実態であるならば、ここには根本的な焦点の共有が欠けているといわなければなりません。目的の確認と方法の充実、そして、教室の成立は、連立するものとして考えなければならないのではないでしょうか。

■〈私〉の問題

少し、個人的な事情をお話しします。気づけば、もう、二〇年以上国語教師を続けていますが、私は、国語を教えるということがどういうことなのか、しっかり考えてこの仕事を選んだわけではなかったのです。どんな人が、高校の国語科の教師になっているのでしょうか。一般的には、大学で国文学・国語学（日本文学・日本語学）あるいは中国文学を学んだ人、または、国語科教育学を学んだ人でしょう。教師になってみてわかったのは、文学や語学を中心に学んできた人は、少なくとも「何を」教えるかということについての〈前提〉みたいなものを持っている。また、教科教育を中心に学んできた人は、「どのように」教えるか、についての〈基点〉を持っている。そんな感じがしていました。

ところが、私には、何もない。私は、文学出身でもなく、教育出身でもない。じつは今もそうですが、私は文学的知識に自信がありません。源氏物語を研究したこともないし、近代文学の代表作を読破した経験もない。必要と興味に任せた、つまみ食いしかしていない。また、授業にも自信がない。世には、教えるために生まれてきた、というような名人、カリスマ教師がおられますが、自分にはぜ

んぜんそんな資質はない。研究授業や実践報告を見聞しても、そもそも、そんなエネルギーもアイデアも湧いてこないのです。当然、日々の授業もつらくなっていきます。

そういう劣等感とともに、うすうす感じていたことが、そもそも国語の授業が、いったい何をめざしているのか、という疑問です。実践報告を見ても、それがよくわからない。例えば、「話し合うことが大切だ」といわれているから、「話し合う」活動をした、うまくいった、と書いてある。題材がよかったとか、班分けの仕方に工夫があったとか、助言のタイミングがよかったとか、そんな批評が添えられていて、もちろん、それはそれでよいのですが、私は、私が欲している一番大事な何かが、そこにはないと感じていました。

私に必要だったのは、教える人、としての〈目標〉や〈方法〉ではなく、生徒としての、すなわち、学ぶ者としての〈目的〉だったのです。例えば、「単位を取る」とか「試験に合格する」というのは、それだけでは〈目標〉＝〈手段〉です。もちろん、社会的に生きていくためのパスポートを手に入れるために大切な〈目標〉であり、それだけを学びや教えの動機にできる人もあるのでしょうが、私にはできない。

■戦後国語教育のアウトライン

私は、考え直すために、2 年間休職し、放送大学の大学院に在籍して、一つの研究をおこないました。そして、それを一冊の本にまとめました。『「国語力」観の変遷――戦後国語教育を通して』という本です。その「あとがき」の一部を引用します。

> 個人的なことですが、わたしは教育へのおそれのようなものをずっと感じてきました。わたしはじぶんを、教育する人、と規定することにためらいを感じます。それはまず、わたしの資質に由来するのでしょうが、もう一つ、教育が社会の動態に深く関係するという認識上の理由があります。
>
> わたしは愚かなことに、社会から超然としてことばを教えたり作品を読んだりする可能性をどこかで信じていました。今も、わたしの本来性が、渦巻きによって右往左往させられることのない境涯を求めていることには変わりありません。

私は、この、「教育が社会の動態に深く関係する」という認識を経て、「渦巻きによって右往左往させられることのない境涯」へ至る道を歩むのに必要な力が、ことばの力だと思っています。少しずつ、そう思うようになってきたのです。これは、いいかえれば、与えられたものから、抜け出していく道、ということです。

教育現場が社会の動向の影響を受けるのは、今に始まったことではありません。国語教育も同じでした。戦後を見渡すだけでも、私たちが今、どういう位置に立っているかがわかります。そのお話をする時間はありませんので、上記の本の内容を要約して発表したときの要旨原稿を資料として付けておきます（2006 年 5 月全国大学国語教育学会）。

■「また、羅生門か！」

さて、「何のための」を考える材料として、最近経験した例をご紹介したいと思います。

この春のことです。転勤して、あたふたしているうちに、「羅生門」をやることになりました。「また、羅生門か！」という思いがありました。たんたんとやればいいようなものですが、何か、自分なりの発見がなければ、授業の芯が立たないような感じがしました。技能目標については、小説の視点・語りの問題と、心情の変化の読み取りという必須項目を立てました。しかし、価値や主題ということについてのあめてが立たない。私自身が、この小説はすごいんだと改めてつかみ直しておかないと、生徒たちに、読みの立脚点を示せないし、授業としても構成できない。

どうしようかな、と思っていたとき、新聞記事で、グローバルに展開しているある日本企業が、賃金を国ごとではなく、世界同一基準にしようとしている、というのを読みました。その国で生きていくために必要な収入、という発想を打ち破るものです。働く者にとっては、チャンスであるとともに、たいへんなリスクが予想されますが、その代表者のことばに、「羅生門」の中で聞いたようなせりふを見たのです。

それは、「グローバル経済というのは、成長か、さもなければ死」、「安い労働力を活用するのは、欧米も中国の企業も同じようにやっている」というものです。これは、「企業が死なないために、犠牲が出ても仕方ない」、「みんなやっている」という論理であり、老婆や下人の論理と同じです。

私は、この記事と「羅生門」をぶつけて、「似ている点」を見つけ、「自分の考え」を書く、という活動をすることにしました。

「自分の考え」を書くところで、生徒は、この「仕方ない」「みんなやっている」論理を批判したり、逆に自分を下人に重ねて、共感を示したりしていました。「みんなの意見」を示して、さらにそれらにコメントするという活動を加えるうちに、他の意見に気づかされることによって、生徒たちの元々の視点が動いていく感じがしました。

私自身の気づきとしては、この作品に「与えられたものから、抜け出していく道」という問いを見つけました。後日、ある社会思想史家へのインタビュー記事で、日本の近代化の根っこに「近代化なんかしたくてしたわけじゃない」という思い、敗戦について「俺たちだけが悪いのか」という思いがあるという指摘を読みました。その人は、「『仕方ない』で何事もやり過ごす日本人の精神風土」を批判し、「自分の言葉をもつ」べきだといっていました。

この「仕方ない」「みんなやっている」論理は、日本の近代に通底している論理なのかもしれない、「羅生門」は、現在の、ある本質的な問いを示しているのかもしれない、このようなことが、今回の学びで得られた発見です。

かつて、秋葉原通り魔事件と「羅生門」を重ねて読んだこともありました。何らかの補助線を引くことによって、小説と自分たちを結ぶ問いを発見すること。そこにも〈何のための国語か〉を考えるヒントがありそうな気がします。

■「神様、どうして授業したらいいか、わからない！」

川上弘美の「神様」という小説は、語り手の「わたし」と「くま」がさんぽする、というお話です。何も事件は起こらないし、心情変化もない。

そして、もうひとつ、「神様 2011」という作品があります。これは、そこが放射能汚染地域だったという設定で、「神様」と同じようにふたりがさんぽするお話です。

同僚と、「神様」のあと、「神様 2011」を使おう、という話はしていたのですが、その「神様」のほうが、どうも、どうやっていいのか、わからない。困って、指導書を見たら、「わたし」に変化はないが、「くま」は変化している、と書いてある。そう読めば、そうかな、という気もして、その構えで授業をして、失敗しました。変化というのは、相対的なもので、「わたし」と「くま」のどちらがより変化していますか、など問うても、根拠示すことはできなかったのです。そして、何より、それを考えたところで、「神様」が示すものをつかまえたことにならない。やってみてわかりました。私自身がよくわかっていないのですから。生徒も、「とりとめのない話」と感じたようです。

次に、「神様」と「神様 2011」を読み比べる作業をしました。

1 「神様2011」を読み、「神様」と異なっているところに、傍線を引こう。
2 特に、〈違いを強く感じたところ〉を書き抜き、そのわけを書こう。
3 〈同じ話〉を、少しずらして描くことによって、同じことと違うことが浮き彫りになる。「神様20

11」は、何を描こうとした小説なのだろうか。考えを書いてみよう。

何も言わずに初めから、読み比べ作業をしたらよかった、というのが結論です。同時代に起きた大きな事故を念頭に置くわけですから、当然なのでしょうが、生徒の取り組みは積極的でした。そして、何かここには、「日常」というものを見つめ直させるものがある、と気づいたようです。

「神様」の失敗を取りもどすべく、試験で、「くま」とは何なのか、という問いを出しました。

…さて、では、そう考えるならば、元の「神様」の「くま」の背後にもまた、「揺らめく影のような存在」が見えはしないか。何かが、「くま」となって、不自由な身の上で、「わたし」に働きかけている。その「何か」とは、どのようなものだと考えられるか。本文を根拠にして考えを書け。

生徒の答えは、例えば、次のようなものでした。

私は、その何かとは自然ではないかと考える。なぜなら、自然はくまと同様に、私たちに害を加えようとしてはいない。また、くまに子供が色々したように、私たちが自然に害を加えても、自然はくまと同様、どっしりと構えたままであるから。

「放射能は見えないから、この小説が成り立つ」と指摘した生徒がいて、なるほど、と思いました。川の見た目は、「あのこと」の前とまったく変わらず、美しい。「見えないものを、見る」という主題を、この二つの読み比べから発見しました。今回のはまったく生徒の書いたものに教えてもらいました。「日常」も「自然」も、タイトルの「神様」もまた、「見えないもの」、あるいは私たちが「見ようとしないもの」です。「見えないもの」を見ようとすることや「見えないもの」へのおそれを忘れてしまった私たちが、どんな愚かなことをしでかすのか、という問いや、それでも、ことばは、その「見えないもの」を見えるようにする力を持つという可能性、などが、取り出せるように思いました。

■世界をつくるためのことば

私たちは、「神様」のいない世界を生きている。「国語」というか、ことばの世界は、神様の世界を代替しているのではないか、と思うことがあります。例えば、「生死」や「恋愛」の問題を実存的に扱うのは、学校の中では「国語」だけです。その意味で、「国語」は、「生きていく」ということの意味について考えることを直接担っています。もう、そう思っていいのではないか。本当は人間には、宗教が必要ですが、私たちには、とりあえず、ことばしかない。

ことばによって、考えを生み出すこと。考えというのは、思想であり、思想というのは、一つの世界のビジョンです。論語に、「人よく道をひろむ――人が道（真理）を大きくするのであって、道が人を大きくするのではない」というのがありますが、よりよく道を広げるために、ことばを鍛える場所の一つが「国語」なのだと思います。

教材をどう選び、補助線をどう引くか、については、指導者の問題意識が関係します。それが目的を見定める意識となります。分科会では、問題意識がどのように教材を発見し、授業に組み立てられていくか、考えていただければと思います。

（資料――生徒の意見例）

【１】「羅生門」と記事の読み比べ

（１）共に生きる選択をするしか、生き残れない

○　…このことから読み取れる問題点、それは人々に「社会全体で協力して生き残っていく」という意識が足りないということである。自国が先進国だからといって、飢餓で苦しんでいる発展途上国を尻目に、毎日膨大な量の残飯を排出していて良いはずがない。自分を取り巻く環境が崩れれば、連鎖的に自分のところも崩壊していくのは、目に見えてわかっているはずである。従業員が燃え尽きれば、企業にも倒産の危機が訪れ、また引剥ぎをすれば、さらに治安が悪くなり、下人自身の敵も増える。発展途上国が壊滅状態に追い込まれれば、その不満の矛先は先進国に向かい、紛争やテロといった衝突が後を絶たない世界になるだろう。

人は一人で生きていけないという。それは組織や国家においてもいえることだと思う。自分が生きていくのが精一杯だというときこそ、お互い手を取り合い、共に解決策を導き出していくことが、この問題を解決する最善の手段ではないだろうか。

（４）極限状態への共感

○　…私は、心では下人などの論理は間違っていると思っている。しかし、いざ自分が下人の立場におかれると、彼らと同じ考えを持ってしまうと思う。最終的には自らを守ることが最優先なので、仕方なく自己中心的な行動に走ってしまうことには少し納得できる。しかし、それを悪いことではない、とは思わない。その点では、少し下人の考えとは異なるが、それ以外の部分では、共感できるところがある。

【２】「神様」と「神様2011」の読み比べ

□　もともと幻想的なイメージだった話が、ちぐはぐになっているような印象を受けた。

それでも「私」とくまは、自分達が特別な話をしていると思っているわけではないはず。彼らの世界の日常的な会話を続けている。そしてその日常は、僕たちの世界にも「あのこと」以来、存在しているのだ。

平凡な文章で、平凡な話なのだけれど、どうしても、ところどころで目に止まる文がある。日常であるはずなのに、違和感を持つ。その違和感をたどっていくと、一番近い気持ちは、**悲しさ**、だと思えた。

世界だって社会だって変化するのだから、日常が変化するのも別におかしなことじゃない。それでも、毎日それに触れているので、違いがわからない。

いつの間にか変わってしまった日常を切り取って、小説に写したのが、「神様２０１１」だと思う。それも、日本人が今、真剣に考えなければならない日常を取り入れて。

久々に会った友人が変わっていたときの**悲しさ**。「変わったな」と言われたときの**悲しさ**。そんな気持ちになって、日常ってこんなに僕たちに近い存在なんだな、と思いました。